

キエフから西側左翼の人びとへの手紙

タラス・ビロウス

オープン・デモクラシー 2月25日付け

「ロシアの行動に目をつぶる“愚かな反帝国主義”」

[A letter to the Western Left from Kyiv | openDemocracy](#)

国土防衛部隊に入るという決断

私はこの文章を、砲撃を受けているキエフで書いている。

最後の瞬間まで、私はロシア軍が全面的な侵攻を見合わせるように望んでいた。今は、**アメリカの情報機関に情報をリークした人たち**に感謝するのみである。

昨日は、半日かけて国土防衛部隊に入ろうかどうか考えた。その日の夜、ウクライナのゼレンスキー大統領が総動員令に署名し、ロシア軍がキエフ包囲のために動き出したので、私は決断した。

しかし部署につく前に、ロシアのウクライナ侵略に対する西側の左翼の反応について、私がどう考えているかを伝えたいと思う。

第一に、私は今ロシア大使館にデモをかけている左派の人たちに感謝している。この紛争ではロシアが侵略者であることに気づくのに時間がかかった人たちもいるけれども。

ロシアに圧力をかけ、侵略をやめさせ、軍隊を撤退させることを支持する政治家たちにも感謝する。

そして、ロシアが侵攻する前の数日間、私たちを支援し、話を聞くために来てくれたイギリスとウェールズの国会議員、組合員、活動家の代表団に感謝する。

また、長年にわたって支援をいただいた英国の「ウクライナ連帯キャンペーン」に感謝する。

西側左翼へのコメント

冷酷無情なこの紛争の行方はまだ定かではないが、近年の戦争から学ぶべきいくつかの教訓がある。

この論考は、西側左翼のなかの一部の人たちについてのものである。

この人たちは、ウクライナへの「NATO の侵略」を思い描き、ロシアの侵略を見ることができなかった。たとえばアメリカ民主主義社会党 (DSA) ニューオーリンズ支部のように。あるいは、DSA 国際委員会は、ロシアに対して批判的な言葉を一言も発しない恥ずかしい声明を発表した（この声明に対する米国の活動家ダン・ラボッツ教授らの批判に深く感謝する）。

あるいは、ウクライナがミンスク合意を履行していないと批判しながら、ロシアやいわゆる「人民共和国」による違反について沈黙したままの人たちもいる。

さらにまた、ウクライナにおける極右の影響力を誇張し、「人民共和国」の極右には気づかず、プーチンの保守的、民族主義的、権威主義的な政策への批判を避けた人たちもいる。今起きていることの責任の一端は、あなた方にある。

これは、欧米の「反戦」運動にある広い現象の一部であり、左派の批評家たちはこれを「キャンピズム」（仲間主義）と呼んでいる。

親口派左翼の行きつくところ

イギリス系シリア人作家で活動家のレイラ・アル・シャミ氏は、これをより激しい言葉で「間抜けものの反帝国主義」と呼んでいる。彼女が書いた 2018 年の素晴らしいエッセイを、まだの方は読んでほしい。

ここでは彼女の主要な主張だけを繰り返すが、シリア戦争をめぐる欧米の「反戦」

左派の大部分の活動は、戦争を止めることとは何の関係もなかった。西側の干渉に反対するだけで、ロシアとイランの関与は無視、あるいは支持し、またアサド大統領をも「正当に選ばれた」政権とって支持した。

多くの反戦組織が、(シリアへの)ロシアとイランの介入について何も言わず、それを正当化して『主敵は国内にいる』と主張した、彼女は書いている。「それを言い訳にして、彼らは戦争を実際に動かしている主役が誰なのかを判断するための、真剣なパワー分析をなにもしなかった」

残念なことに、ウクライナをめぐっても我々は同じイデオロギーの決まり文句が繰り返されるのを目にしてきた。今週初めにロシアが「人民共和国」の独立を承認した後も、アメリカの左派雑誌『ジャコバン』のブランコ・マーセティック記者は、ほぼ全面的にアメリカ批判に特化した記事を書いている。プーチンの行動に関しては、彼はロシアの指導者が「あまり芳しくない野心を示した」と述べるだけだった。マジか？

私は NATO の熱烈な支持者ではない。冷戦終結後、NATO が防衛的機能を失い、攻撃的な政策をとっていることは知っている。NATO の東方拡大が、核軍縮や共同安全保障システムの形成に向けた努力を台無しにしたことも知っている。NATO は、国連や欧州安全保障協力機構 (OSCE) の役割を脇に押しやり、「非効率な組織」として信用を失墜させようとした。しかし、私たちは過去を取り戻すことはできないし、この状況から抜け出す方法を探すには、現在の状況に基づいて方向づけを行わなければならない。

西側の左翼は、ロシアのゴルバチョフ元大統領と米国との NATO に関する非公式な約束（「1 インチたりとも東進しない」）を何度持ち出し、ウクライナの主権を保証した 1994 年のブダペスト覚書に何度も言及する。西側左派は、世界第 2 位の核兵器を保有するロシアの「正当な安全保障上の懸念」を何度も支持する。ではウクライナの安全保障上の懸念は何度思い起こしたのだろうか。ウクライナは米露の圧力によって核兵器と（主権の確保）を交換しなければならなかったが、それを補償したブダペスト覚書は 2014 年にプーチンによって決定的に踏みこたれてしまった。NATO を批判する左派の人たちは、NATO の拡大がもたらした変化の主要な犠牲者がウクライナであることに思いいたったことがあるの

だろうか。

西側の左派は、ロシアを批判する人びとにたいして、何度も何度も、アフガニスタンやイラクなどへの米国の侵略があるといった。もちろん、これらの国のことを議論する必要はある。しかし、厳密に、どのように議論するのか？

左派の主張は、2003年にイラクをめぐる他国の政府が米国に十分な圧力をかけなかった。けれども今、ウクライナをめぐるロシアへの圧力を軽くする必要があるわけではないというべきだ。

明らかな誤り

2003年、アメリカがイラク侵攻の準備をしていたとき、ロシアがここ数週間のアメリカのように振る舞い、エスカレーションの脅しをかけていたら（どうなっただろう）。

そのとき、ロシアの左派は「主敵は国内にあり」という教義に従って、どのような行動をとっていたかを想像してほしい。この「エスカレーション」について、「帝国主義間の矛盾を危うくしてはならない」とロシア政府を批判していただろうか。その場合、そのような行動が誤りであったことは、誰の目にも明らかである。ウクライナに対する侵略の場合には、なぜこのことが明白でないのだろうか。

今月初めの別の Jacobin の記事で、マーセティック記者は、Fox News のタッカー・カールソンが「ウクライナ危機」に関していったことは「完全に正しい」とまで言っている。カールソンが行ったのは、「米国にとってのウクライナの戦略的価値」を問うことだった。左派評論家のタリク・アリでさえ「新左翼レビュー」誌で、ドイツのシェンバツハ提督の見方を好んで引用している。提督は、ウクライナ問題でプーチンに「尊敬」を与えることは、ロシアが中国に対して有用な同盟国となりうることを考えれば「ローコスト、ノーコストでさえある」といっているのだ。本気なのだろうか？もしアメリカとロシアが合意に達し、同盟国として中国に新たな冷戦を始めることができれば、それは本当に我々が望んでいることなのだろうか？

国連の改革

私はリベラルな国際主義を熱烈に支持しているわけではない。社会主義者はそれを批判すべきだ。しかし、これは帝国主義国家間の「勢力圏」分割を支持しなければならないという意味ではない。左翼は、二つの帝国主義の間の新しいバランスを探るのではなく、国際安全保障秩序の民主化のために闘わなければならない。私たちは、国際安全保障のグローバルな政策とシステムを必要としている。後者には、国連がある。国連には確かに多くの欠陥があり、しばしば批判の対象となる。しかし、批判は反論のためにすることも、改善のためにすることもできる。国連の場合、私たちは後者を必要としている。国連の改革と民主化について、左翼的なビジョンが必要なのだ。

もちろん、左派が国連の決定事項のすべてを支持すべきだという意味ではない。しかし、武力紛争を解決する国連の役割を全体的に強化すれば、左派は政治・軍事同盟の重要性を最小化し、犠牲者の数を減らすことができるようになる。(前回、ドンバス紛争を解決するために、国連平和維持軍がどのような役割を果たすことができたかを書いた。残念ながら、これは現在では妥当性を失っている) 結局のところ、気候危機やその他の地球規模の問題を解決するためにも、国連は必要なのである。多くの国際的な左翼がそれを訴えることに消極的なのは、とんでもない間違いである。

ロシア軍がウクライナに侵攻した後、ジャコバン誌のヨーロッパ編集者デービッド・ブローダーは、左派は「米国による軍事対応に反対することに釈明はいらない」と書いた。軍事的な対応はバイデンが何度も言っているように、とにかくバイデンの本意ではない。しかし、西側の左派の大部分は、「ウクライナ危機」に対する対応で完全に誤ったことを正直に認めるべきである。

私の見方

最後に、私自身と私の見方について簡単に書いておく。

過去 8 年間、ドンバス戦争が主要な問題となって、ウクライナ左派は分裂した。私たち一人ひとりが、個人的な経験などの影響を受けて立場を形成してきた。したがって、別のウクライナ人左派であれば、この記事の書き方も違っていただろ

う。

私はドンバスで生まれたが、ウクライナ語を話す民族主義者の家庭で育った。父は 1990 年代に極右派に加わった。ウクライナの経済的衰退と旧共産党指導部の富裕化を見たからだ。彼は 1980 年代半ばからそれと戦ってきたのだ。彼はもちろん非常に反ロシア的であるが、同時に、反米的な考えも持っている。2001 年 9 月 11 日に彼が発した言葉を私は今でも覚えている。米貿易センタービルが崩壊するのをテレビで見ながら、犯人たちは「英雄」だと言ったのだ（彼はもうそう思っていない。今は、アメリカ人がわざと爆破したと思っている）。

2014 年にドンバスで戦争が始まると、父は極右のエイダル大隊に志願し、母はルハンスクから逃れ、祖父と祖母は「ルハンスク人民共和国」の支配下に置かれた村に留まった。祖父はウクライナの「オレンジ革命」（2004 年）を非難した。彼は「ロシアに秩序を取り戻した」といって、プーチンを支持している。それでも、私たちは皆、（政治の話ではないけれど）お互いに話をし続け、助け合うようにしている。私は、彼らに思いやりの心をもつようにしている。なんといつても、祖父と祖母は集団農場で働きながら人生を過ごしてきたのだ。父は建設作業員だった。彼らにとって、人生は決して優しいものではなかったのだ。

2014 年の出来事--革命に続く戦争--は、私をウクライナの多くの人々とは反対の方向へと押しやった。戦争は私の中のナショナリズムを殺し、私を左派に押しやった。私は国家のためではなく、人類のより良い未来のために戦いたいと思っている。両親は、ソ連崩壊後のトラウマに陥ったため、私の社会主義的な考えを理解してくれない。父は私の「平和主義」を見下しており、私が極右のアゾフ連隊の解散を求めるプラカードをもって反ファシストデモに参加した後、会話は険悪になった。

ゼレンスキーの登場

2019 年春にゼレンスキーがウクライナの大統領になったとき、私はこれで破局はさけられるのではないかと期待した。何しろ、彼はドンバスの和平計画を掲げて勝利したのだし、ロシア語を話し、そのジョークはロシア人だけでなくウクライナ人にも人気だった。そのような大統領を悪者にするのは難しいのだ。しかし、

残念なことに、私は間違っていた。ゼレンスキーの勝利は、多くのロシア人のウクライナに対する態度を変えたが、戦争を防ぐことはできなかった。

近年、私は和平プロセスについて、またドンバス戦争における双方の民間人犠牲者について書いてきた。対話を促進しようとした。しかし、これは今、すべて灰じんに帰した。**もはや妥協はありえない**。プーチンは望むどのような計画をたてることもできる。ロシアがキエフを占領し、占領政府を樹立したとしても、我々はそれに抵抗する。この闘いは、ロシアがウクライナから撤退し、すべての犠牲者とすべての破壊の代償を払うまで続くだろう。

したがって、私の最後の言葉は、ロシア国民に向けられたものである：はやくプーチン政権を打倒せよ。それがあなた方のためであり、私たちのためでもある。

◎筆者のタラス・ビルスはウクライナの歴史家で、「社会運動」団体の活動家。。社会批評誌「コモンズ」の編集者として、戦争とナショナリズムをテーマに執筆活動している。